

ウイグル仏教における弥勒信仰

ーその起源と発展への試論ー

笠井幸代

(Research Staff of the Turfanforschung, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities, Germany)

目次

- 0. 序
- 1. ウイグル族と仏教
 - 1.1. ウイグル仏教の成立
 - 1.2. 弥勒信仰とマニ教
 - 1.3. *Maitrisimit*
- 2. 古ウイグル語仏典奥書に現れる弥勒信仰
- 3. ウイグル仏教と唯識学派
 - 3.1. ウイグル仏教文献に見る唯識学派の影響
 - 3.2. 敦煌仏教における弥勒信仰
- 4. 古ウイグル仏教文献中の弥勒信仰
- 5. 結語

【キーワード】 ウイグル仏教 古ウイグル語仏典 弥勒菩薩 上生信仰

0. 序*

釈迦牟尼仏入滅の 56 億 7 千万年後、この世に現れて衆生を救うといわれる弥勒菩薩は仏教文化圏において広く信仰を集めた菩薩の一尊格であるが、その信仰には様々な形態がある。とりわけそのうちの二つ、下生信仰と上生信仰は広く流行しており、重要である¹。そもそもこの菩薩は現在、兜率天という場所で説法を行っているが、時が満ちるとこの世に出現（下生）し衆生を救うとされている。弥勒による救済はこの世で行われるのであり、救済を願う衆生は弥勒が出現するその時にこの世に生まれ変わることが必要である。下生信仰ではこの点が特に強調され、それを支える下生經典では、弥勒の出現したこの世の様子を描いている。一方上生信仰では、弥勒が現在説法をしている兜率天への生まれ変わり（上生）を願う。この場合も最終的には弥勒共々この世に下生しなければ成仏できないはずだが、ことさらに前半部分の兜率天上生が強調され、最終目的であるかのように扱われていることも珍しくない²。

このように二つの方向性を持った弥勒信仰だが、仏教を信奉したトルコ系遊牧部族、ウイグル族³の間にも広まったことはよく知られている。本稿ではウイグル仏教における弥勒信仰の形態について論じるが、本論に入る前にウイグル族が如何にして仏教を信仰するようになったかを手短かにまとめて紹介したい。

1. ウイグル族と仏教

1.1. ウイグル仏教の成立

そもそもウイグル族とは古代トルコ語を話す遊牧部族の一つで、744 年にモンゴリア～東部天山地域まで跨がる強大な遊牧帝国を建設し、東ユーラシアの歴史に大きな影響を及ぼした。この時期、ウイグ

* 本稿の一部は 2008 年にベルリンで行われた学会での発表に基づいている。この時の発表原稿は既にドイツ語で発表されている [Kasai 2013]。本稿は既発表の拙稿を大幅に修正するものではなく、その後発表された文献を考慮に入れた増補版と位置づけられる。本稿執筆に当たり、赤木崇敏氏（大阪大学、招聘研究員）、打本和音氏（龍谷大学、BARC リサーチアシスタント）には専門家の立場から有益な助言を頂いた。ここに記して感謝したい。もちろん本稿に含まれる誤りは全て筆者の責任である。また本稿を執筆するきっかけとなった龍谷大学での一ヶ月の研究滞在を可能にくださった三谷真澄氏（龍谷大学、国際文化学部教授）にも改めて感謝の意を表したい。

¹ 本稿の元となった口頭発表（2014 年 9 月 22 日、龍谷大学）を行った際、入澤崇氏（龍谷大学、文学部教授）はそもそも「上生信仰」と「下生信仰」という区別をすること自体が問題ではないかとの疑問を呈された。本稿にとっても非常に重要な指摘であり、熟考すべき点であると思う。しかしながら後述するように、ウイグル仏教の分野では、現在に至るまで弥勒信仰の存在は認識されていたものの、史料的制約もあってその信仰形態について詳細に議論されることは殆どなかった。そのため、敢えて「上生信仰」「下生信仰」という区別を使用し、ウイグル仏教における弥勒信仰の形態について少しでも議論を深めることを本稿の目的としたい。

² 弥勒信仰に関しては様々な研究が存在するが、その信仰形態の発展に関しては例えば、香川孝雄氏や J. Nattier 氏の研究が簡潔にまとめられていて分かりやすい [香川 1963; Nattier 1988]。また弥勒經典の研究に基づく中国の弥勒信仰発展に関しては松本文三郎氏の研究が詳しい [松本 1911]。さらに打本和音氏の論考はガンダーラにおける上生信仰の興起を画像と文献の両方から証明し、それが上生信仰唯一の所依經典とされる『上生經』の成立よりも早いことを指摘しており、上生信仰の成立を考える上で非常に興味深い [打本 2012]。

³ ここでは 10 世紀から 14 世紀の彼等の活動を対象とする。

ル族は西方由来のマニ教と出会い、紆余曲折の末にこの宗教は、第七代可汗の時代から継続的に支配者層の手厚い保護を受けた。ところが東ウイグル可汗国は、840年に別の遊牧民族の攻撃を受けて瓦解、多くのウイグル人はモンゴリアを離れ、西の天山山脈東部へ移動する⁴。そこで新たに建設された西ウイグル王国は、最終的にトルファン地域にある高昌と北庭を首都として、モンゴル期に入ってもなお一定の独立性を保って存続した。この王国でもウイグル人たちはしばらくの間、マニ教を信奉していたが、天山地域に元からいた住民の影響で徐々に仏教を受容していく。そしてマニ教と仏教の共存を経て10世紀後半、ついに仏教がマニ教から西ウイグル王国の国教的地位を奪うにいたる。

このような経緯を経て仏教は、西ウイグル王国内で広く信仰されるようになったが、その流入に際しては主にこの地域に居た土着の仏教徒、トカラ人と漢人、が大きな役割を果たしたと考えられている。まずウイグル人に仏教が浸透し始める初期の段階にはトカラ仏教と漢人仏教の両者が大きな影響を与えたが、徐々に後者の影響が増大し、古ウイグル仏典も専ら漢文を原本として翻訳されるようになっていった。ただ、ウイグル族を含めたトルコ族全体における仏教信仰に関していうと、その初期に多大な影響を与えた要素の一つをソグド仏教と見るか、トカラ仏教と見るかで議論が分かれていた。前者の説はJ. P. Laut氏の著書に代表され、後者の説は森安氏の論文に詳しい⁵。古ウイグル語仏典に使用されるサンスクリット語由来の仏教用語の多くがトカラ語経由で借用されているという事実を鑑みれば、ある時期にトカラ仏教がウイグル仏教に多大な影響を与えたことは否定できず、この点はソグド仏教からの影響を強調するJ. P. Laut氏にも正しく認識されている⁶。その一方で、幾つかのソグド語で書かれた仏典をウイグル人が書写、使用した形跡が見られることが吉田豊氏により指摘されている⁷。この事実を考慮すれば、ウイグル仏教の成立に際し、ソグド仏教が何の役割も果たさなかったと断言することは難しい。吉田氏が正しく指摘されたように、この問題に関しては更なる詳細な研究が必要である。いずれにしても、こうして多方向から様々な影響を受けて成立したウイグル仏教は13世紀のモンゴル帝国成立後も長く信仰を集めることになる。

1.2. 弥勒信仰とマニ教

このウイグル仏教において、弥勒信仰の流行は特にその初期に顕著に見られることが指摘されてきた。その際頻繁に議論されたのがマニ教との関係である。イランで成立したマニ教は、特に中央アジアで展

⁴ ウイグルの西遷に関しては森安1977を参照。

⁵ Laut 1986; 森安1989参照。

⁶ 借用語の問題に関してはMironov 1929, 158-168; 庄垣内1979; Moerloose 1980等を参照。Laut氏は実際にトカラ語から翻訳された古ウイグル語仏典の研究を発表し、その中でトカラ仏教の重要性を強調している[Geng/Laut/Pinault 2004a, b]。

⁷ 吉田2007, 63-66参照。

開していく際に、既にこの地に根付いていた仏教と密接な関係を持ち、そこから影響を被った可能性を指摘されている⁸。マニ教に見られる仏教的要素の中でも弥勒の役割は特に重要で、創始者であるマニ本人と同一視され、さらに「最後の日」にはマニが再び弥勒となって体を得て信者たちを救う為にこの世に現れるという⁹。こうした教義がマニ教に存在していたことを考慮すれば、マニ教を信仰していたウイグル人たちの間にも弥勒信仰はそれほど抵抗なく受け入れられていったことは想像に難くない。またこの流行を裏付けるように、ウイグル仏教初期には弥勒を題材とした長大な経典 *Maitrisimit* が古ウイグル語に翻訳されている。

1.3. *Maitrisimit*

Maitrisimit はインド＝ヨーロッパ語の一つであるトカラ語で書かれた *Maitreyasamiti-nāṭaka* を手本として古ウイグル語に翻訳され、これまでにセンギム、ムルトック、ハミから少なくとも三種の写本が発見されている。そのうちセンギム本は諸説あるものの、おそらくは 9～10 世紀ごろの成立とされ¹⁰、最も新しいハミ本は 1067 年の書写と判明しており¹¹、かなり長期間この経典が流行していた様子がうかがえる。内容は弥勒が下生したこの世の描写で、典型的な下生経典と言える。前述のマニ教教義における弥勒の位置づけを見ても、下生信仰がウイグル人の間に広まったことはごく自然な流れであっただろう。

Maitrisimit の存在は確かにウイグルに下生信仰が流行していたことを示唆している。またハミ本の書写年代から見て、その流行が少なくとも 11 世紀まで継続していたことも事実であろう。ただこれまでのウイグル仏教における弥勒信仰の研究といえば、この *Maitrisimit* にのみ着目するだけで、その信仰形態まで踏み込んで議論されることはほぼ皆無といってよかった。それゆえウイグル仏教に流入した弥勒信仰とはすなわち下生信仰と見なして良いのか、またそもそも弥勒信仰の流行は 11 世紀までというウイグル仏教史の初期のみに限定されるものであったのだろうかという疑問点は未だ十分に検討されては来なかったのである。

⁸ 例えば Sundemann 1997 を参照。この論文には吉田氏による日本語訳が存在する [吉田 1997]。

⁹ Klimkeit 1987, 64-65; Hutter 2002 等参照。

¹⁰ von Le Coq 1919, 103; von Gabain 1957, 27; 森安 1989, 20; Laut 2002, 135 等参照。

¹¹ 森安 1989, 21, 26-27, 註 89。また P. Zieme 氏ら複数の研究者は J. Hamilton 氏が森安氏とは関係なく同年、独自に同様の結論に達していると報告している [Zieme 1990, 67, Fn. 10 等]

2. 古ウイグル語仏典奥書に見られる弥勒信仰

少なくとも初期に古ウイグル語に翻訳されたと明確に判明している仏典中、上生經典に類するものは現在まで見つかっていない¹²。しかしながら仏典や注釈書以外にもウイグル人仏教徒の信仰を今に伝える史料が存在する。それが仏典や注釈書の末尾に後から付された奥書と呼ばれる文章である。この奥書は、誰によって、何時、いかなる目的でその仏典が作成、翻訳もしくは使用されていたかを他者に伝える目的で書かれるもので、その作成者にに基づき(1)作者、(2)翻訳者、(3)依頼人、(4)書写人、(5)読者の5つに分類できる。このうち(3)依頼人による奥書が最も長く、情報量も多い。この古ウイグル語仏典奥書はその重要性にいち早く気づいた P. Zieme 氏により既に精力的に研究が進められ、特に依頼人奥書には一定の書式が存在したことが判明している¹³。氏の研究によれば、奥書は、(A) 導入句で始まり、(B) 日付、(C) 依頼人の名前、(D) 仏典の書写・印刷を依頼するに至ったきっかけ、(E) 功德の回向、(E1) 守護神への回向、(E2) 支配者への回向、(E3) 依頼人家族への回向、(E4) 依頼人自身と全ての衆生への回向、(F) 願望・目的が述べられた後、(G) 結びの句で終わる¹⁴。この書式はいくつかの序文や銘文にも転用されており、本稿ではそのようなものも含めて便宜的に奥書と総称しておく。このうち (F) 願望・目的では一般的な仏教的願望が表明されることが多いものの、依頼人の特定の信仰が反映されている場合も一部存在する。筆者の把握している限り、以下の十点において弥勒信仰の痕跡を確認できる¹⁵。

① *Maitirisimit* U 3807; U 3803; U 3615b [T II S 2 B 102], ll. 57-62. (9~10 世紀?)¹⁶

*keniñä maitri b[ü]rhan birlä sokušup burhan kutuñ a[ka]š bulup yiz k(a)lp üc asanke altı paramit ädgü kalıñ
toşgurup vizir örgün izä olurup burhan kutın bulmakum(i)z bolzun*

「その後、弥勒仏と遇って仏果のための授記を得て、百劫三阿僧祇六波羅蜜、良き行いを満たして、金剛坐に坐して仏果を得ますように！」

② *Maitirisimit* D 2669 [59 HW 1/28 AB], ll. 45-53. (1067年)¹⁷

*t(ä)ñri yerintä tuğsar tužit t(ä)ñri [yerintä mai]tri bodis(a)v(a)t üskintä tug/zunlar] kayu üdün tözün maitri
b[odisatav] tužit t(ä)ñri yerintä enä [yarlıkaduk]-ta biz y(e)mä kamağ ka kadaş anta ketumati kändä birlä*

¹² 古ウイグル語に翻訳された仏典を概観するには J. Elverskog 氏の著書が便利である[Elverskog 1997]。ただしこの本の出版後にも古ウイグル語仏典の研究は精力的に進められており、多数の經典の存在が新たに判明している。

¹³ Zieme 氏の研究成果はその著書 Zieme 1992 にまとめられている。

¹⁴ この書式の来源に関しては、笠井 2011 参照。

¹⁵ ここに挙げた奥書は全て拙著で扱ったものである。そのため、詳しい先行研究や関連資料に関する説明は拙著の該当部分を参照されたい。該当部分はそれぞれの奥書に付された脚注に提示する。

¹⁶ BT XXVI, 181-184, Colophon No. 82.

¹⁷ BT XXVI, 195-199, Colophon No. 100.

enälim : maitri bodis(a)v(a)t burhan kutın bultukta biz kamagun anta burhan kutıña alkaš bulmakım(i)z bolzun

「もし彼らが天の地に生まれ（変わる）なら、彼らは兜率天に、弥勒菩薩の面前に生まれ変わりますように！もし高貴な弥勒菩薩が兜率天から降られる時には、私たちも全ての親戚もそこに、Ketumafīという名の町に共に降りよう！弥勒菩薩が仏果を得られる時には、私たちも皆そこで、仏果のための授記を得ることがありますように！」

③ Maitirisimit 文書番号不明，第八葉，ll. 1-2. (1067年)¹⁸

[mān čuu taš] y(e)gān tot[ok] maitri burhan-ka tuš bolayın tep bititīm :

「私，Čuu Taš Y(e)gān Totokは弥勒仏に遇おう！と（この經典を）書かせた」

④ 『慈悲道場懺法』 文書番号不明（中村不折コレクション），ll. 8-9. (モンゴル期以前?)¹⁹

bo buyan ädgü kalıñ tüšintä kayu kayu täginčs(i)z oron-larda tug[mış]ları bar ärsär ol oron-larda oz[up] kutlurup üst[ün] tužit yerintä tugmak-ları bolz[un]

「この福德業の果により，（教えの）及ばないどんな場所に（私の家族が）生まれ（変わって）いようとも，その場所から脱して上方の兜率天の地に生まれることがありますように！」

⑤ 観音菩薩への讃歌 U 4921 [T II D 199], ll. 17-18. (モンゴル期以前?)²⁰

bo buyan ädgü kalıñ kücintä maitri burhan-ka tuš bolup maitri burhan-tın burhan kutıña vyakrt alkaš bulup sansar-tın ozup nirvan-lıg enčgü-kä tärk üdün [täg]mäkim(i)z bolzun

「私たちがこの福德業の力により，弥勒仏に遇って，弥勒仏から仏果のための授記を得て，輪廻から脱して，涅槃の平安に速く達することがありますように！」

⑥ 經典集 U 4662 [T I p]; U 4764; U 4441, ll. 37-41. (13～14世紀)²¹

ayaguluk ı-dok üç ärdini-lär-niñ adıştıt-ınta ögüm kañım öri ulug-larım [üz]älikiz nom boşgurmış bahşı-larım ülgülänčsiz özlüg yaş-[lıg yertinčü]-tä üstün tužit-ta öz öz t[ilämiš tap]-lar-ınça tugmak-ları bolzun :

「敬うべき聖なる三宝の祝福により，我が母，我が父，我が大人，無上の法を教えた我が師たちが無量寿を持つ世（かもしくは）上方の兜率天にそれぞれの望んだ望みのように生まれ（変わる）ことがありますように！」

¹⁸ BT XXVI, 200-201, Colophon No. 103b.

¹⁹ BT XXVI, 227-228, Colophon No. 123.

²⁰ BT XXVI, 229-231, Colophon No. 124.

²¹ BT XXVI, 239-243, Colophon No. 129.

- ⑦ 不明の経典 U 1568 [T I D 561], ll. 28-29. (13～14世紀?)²²

[üs]tün tužit t(ä)ri yerintä burh[an]-[lar] ulus-ınta [t]ugmak-ları bolzun :

「上方の兜率天の地に、仏国に生まれ（変わる）ことがありますように！」

- ⑧ 不明の経典 U 3092 [T II Y 15.505], ll. 8-9. (モンゴル期以前?)²³

y(e)mä kayu kün bo ätöz kodsar-biz maitri burhan birlä tuš bolup [sansar]-da kutrulmak(i)z bolzun

「そしてどんな日に私たちがこの体を捨てようとも、弥勒仏と遇って、輪廻から脱することがありますように！」

- ⑨ 不明の経典 SI 2 Kr. 86 (St. Petersburg), l. 26. (13～14世紀?)²⁴

ol ol oron-larıntın ozup kutrulup üstün tužit t(ä)ri yerintä burhan-lar ulus-ınta tugmak-ları bolzun

「それらの場所から脱して上方の兜率天の地に、仏国に生まれ（変わる）ことがありますように！」

- ⑩ 第1棒杭文書, ll. 10-12. (1008年)²⁵

bo buyan kücintä keniñä töziñ maitri burhanıg tuš bolalım . maitri burhantın burhan kutıñ töziñ alkaš bulalım .

ol alkaš kücintä yiz k(a)lp üç asankı altı paramit tušgurup keniñä burhan yertinčüda b(ä)lgürmäkim(i)z bolzun .

「この功德の力によって私が後に気高い弥勒仏に遇えますように！弥勒仏から仏果のため
の聖なる授記を私が得ますように！この授記の力によって百劫三阿僧祇六波羅蜜を完成させて、その後には仏土に私たちが出現することがありますように！」

まず、これらの奥書が書かれた年代に注目したい。前述のように奥書には普通（B）日付が付されるが、ほとんどの場合六十干支によるもので、それから正確な年代を決定するのは容易ではない²⁶。ただ古ウイグル語を書く際に使用されるウイグル文字の書体にはいくつかの歴史的段階があり、また印刷はモンゴル期に限定されることから、大まかな年代決定が可能な場合もある²⁷。上に引用した10点の奥書の中にも印刷されたものが何点か含まれ、それらは確実にモンゴル期、すなわち13世紀から14世紀に分類される。少なくともこれらの奥書を見る限り、弥勒信仰はウイグルに仏教が流入した初期に限定されることなく、モンゴル期に至るまで長く保持されていたようである。

次に弥勒信仰に関わる部分の記述を見てみよう。まず奥書①、③、⑤、⑧、⑩では単に弥勒仏との邂逅を願うだけで場所は特に明記されていない。①、⑤、⑩のように、仏から未来に成仏できるという保

²² BT XXVI, 254-256, Colophon No. 137.

²³ BT XXVI, 259-260, Colophon No. 140.

²⁴ BT XXVI, 269-272, Colophon No. 152.

²⁵ Moriyasu 2001, 158-183 等参照。

²⁶ 一部年代の判明している奥書に関しては、Zieme 1981 参照。

²⁷ 書体を含む年代決定とその問題点については、森安 1994 が詳しい。

証の言葉である「授記」を授けられることを望んでいる場合は、下生を前提としていると考えるべきかもしれないが、この奥書を書かせた依頼人がそこまで授記というものを明確に理解していたかどうかは不明である。また③ではその授記にすら言及しておらず、依頼人の弥勒信仰が果たして上生と下生のうちいずれの傾向を持っていたのかを決定することは不可能である。それに対して②はまずは兜率天への上生、そして弥勒仏と共にこの世に下生することまでが依頼人の願いとして丁寧に述べられている。②は *Maitrisimit* に付された序文であり、そこに下生信仰が反映されていることは、經典の性格とも完全に一致する。翻って残り四点の奥書④、⑥、⑦、⑨には兜率天への上生だけが言及されている。もちろん弥勒による救済には下生が前提であると考えれば、自明の部分は省略されたと見ることも可能である。しかしそれでもこれら4点の奥書では上生がより強く意識されていたという点には留意すべきである。

3. ウイグル仏教と唯識学派

3.1. ウイグル仏教文献に見る唯識学派の影響

それでは、こうした上生信仰もしくはその傾向はどこからもたらされたのであろうか？ 上述のように弥勒經典として有名な *Maitrisimit* は下生經典の一種であり、この經典だけでウイグル仏教における上生信仰の形跡は説明できない。もちろん上生信仰はなにも特殊な信仰ではなく、*Maitrisimit* の手本となった *Maitreyasamiti-nāṭaka* のあるトカラ仏教でも下生、上生信仰が併存していて、すでにウイグルにもトカラ経由でこの信仰が流行していたという可能性は十分に考えられる。しかしそれではウイグル仏教の弥勒信仰とは単にトカラ仏教にのみその起源を求められるもので、他の可能性は完全に排除すべきなのだろうか？

ここで注目したいのは、現在までに知られている古ウイグル語仏教文献中で上生信仰と直接関係のある經典、『觀弥勒上生兜率天經贊』である。この文献は中国における実質的な唯識学の祖とされる窺基の手による上生經典『仏説觀弥勒菩薩上生兜率天經』への註釈書だが、彼やその師である玄奘が弥勒菩薩を熱心に信仰し、さらにそれが上生信仰であったことはよく知られた事実である。古ウイグル語訳『觀弥勒上生兜率天經贊』の成立年代は不明だが、橘堂晃一氏によれば、おそらく単独の文献ではなく唯識関連の様々な文献を集めた大著、いわゆる *Lehrtext* 「教義書」の一部を構成しているという²⁸。

そもそもウイグル仏教と唯識学の密接な関係は既に百済康義氏により指摘されていた²⁹。氏の指摘は

²⁸ 橘堂氏は当初、この文献を独立したものと考えられていたが、その後 *Lehrtext* の一部であると考えを改められている [橘堂 2008; Kitsudō 2013, 240, Fn. 50]。この文献に関しては氏の博士論文でも詳述されている [2014, 94-97]。未発表の博士論文の使用を許可された橘堂晃一氏（龍谷大学、非常勤講師）に改めて謝意を記したい。

²⁹ 百済 1983, 201. 氏の説は後に K. Röhrbom 氏にも取り入れられている [Röhrbom 1997, 551]。

10世紀終わりから11世紀初頭に活躍し、漢文から多数の經典を翻訳したとして有名なウイグル訳経僧、シンコ＝シェリ＝トゥトゥング (Sinko Šali Tutun) に関するものであった。確かにこの訳経僧は中国における唯識学の祖ともされる玄奘の伝記、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』の翻訳も行っており、唯識学派に属していた可能性は極めて高い。さらに百済氏の指摘で特に重要なのが、敦煌仏教との関係である。

敦煌仏教に関しては、上山大峻氏の有名な研究が存在する³⁰。それによれば8世紀後半、唯識学の中心地の一つ、長安の西明寺で学んだ曇曠という学僧が敦煌へ移ったことにより、この教学とそれに属する様々な經典が敦煌に紹介され非常な流行を見た。曇曠の伝えた学統は彼の死後もその影響を受けた法成という学僧の活躍により継承されていった。確認される最も遅い法成に関する活動年次は859年であり、少なくともこの時期までは彼によって確かに敦煌唯識学が継承されていたものと考えてよい。この時期、敦煌は約60年にもわたる吐蕃支配期を経験し、851年によりやうそこから脱して帰義軍節度使設置という形で再び漢人の手に復する。こうした激動の時代にも関わらず唯識学は絶えることなく学習、研究され続けたのである。そして敦煌における帰義軍政権成立とほぼ時を同じくして、西遷したウイグル人たちが天山東部に西ウイグル王国を設立している。後にこの王国の中心となるトルファン地域と敦煌とは東西交渉路上の重要な拠点として古くから相互に密接な関係を築いてきた。両政権の基盤が安定すればその交流は徐々に旧に復し、とくに10世紀に入ると両者の往来はいよいよ盛んとなった³¹。中国西北地域における仏教の一大中心地である敦煌とのこうした密接な関係が、西ウイグル王国における仏教の勢力拡大の大きな要因の一つとなったであろうことは想像に難くない。事実、前述のように10世紀後半になると仏教は、マニ教から国教的地位を奪うまでに成長する。また当初は漢人仏教と同じくウイグル人に対して大きな影響力を誇ったトカラ仏教も、徐々に漢人仏教の影に隠れて存在感を失っていくが、この変化も敦煌との関係強化がその一端を担っていた可能性は十分に考慮すべきである。

3.2. 敦煌仏教における弥勒信仰

このような両者の密接な関係を考えれば、ウイグル仏教における唯識学的傾向の起源は、少なくともその一端が敦煌仏教にあったと考えてもあながち間違いではなかろう。それでは敦煌にもたらされた唯識学にもその祖である窺基や彼の師玄奘に見られるような上生信仰の伝統は受け継がれていたのだろうか？

窺基も玄奘も中国唯識学に限らず、中国仏教史上重要な役割を果たした有名な学僧である。そのため唯識学との関係は別として、彼らの著作は当然敦煌へ伝えられていたであろうし、その際彼らの信仰も

³⁰ 上山 1964; 1967-1968.

³¹ 両地域の交流に関しては森安、栄両氏の研究が詳しい[森安 1980; 1985; 1987; 2000; 栄 1991].

何らかの形で知られるようになっていたとしても不思議ではない。実際著作に関しては、窺基の『観弥勒上生兜率天经赞』と、講经文と呼ばれる文献との関連が示唆されている。講经文とは仏教經典の内容を聴衆に説明する為に作られた文献で敦煌でも多数発見されている。平野顯照氏の研究によれば、講经文の文体の成立に窺基の前述の注釈書が重要な役割を果たしたという³²。さらに玄奘の弥勒信仰に関しては、現在ロンドンのスタインコレクション中に保存されている S.522 が興味深い³³。この文書は「消滅交念往生發願文」という題が付される作者不詳の願文の一種だが、重要なのはその冒頭二行である。

南无弥勒如来應正等覺。願我含識速奉慈顏。

南无弥勒如来助居内衆。願捨命已後得生其中。

「南無弥勒如来！応正等覺！私（のような）衆生が速くその慈顔を奉ずることができますように！南無弥勒如来！（兜率天の）内にいる衆生を助け居られる（方よ）！命を捨てて後、その（＝兜率天の）中に生まれる事が出来ますように！」

弥勒への皈依と上生への願いが頌の形で表現されている。この頌に関して文中には典拠などは明記されていないが、ほぼ同じ頌が『大唐大慈恩寺三藏法師傳』に玄奘が自らの死の直前に作ったものとして現れる³⁴。

南無弥勒如来應正等覺。願與含識速奉慈顏。

南無弥勒如来所居内衆。願捨命已必生其中。

多少字の異同はあるものの、上の願文の冒頭が玄奘の頌から転用されたものであることは一目瞭然である。願文の作成年代は不明だが、少なくとも玄奘の死後であることだけは確かである。玄奘の数ある逸話や頌の中から、弥勒信仰を顕著に示すこの頌を選んで他の文章へ転用したという事実は、彼の信仰が敦煌でも広く知られていた可能性を示唆する。少なくとも玄奘、窺基両名の弥勒に関する著作やその信仰は敦煌でも有名であったのであろう。

では敦煌における唯識学の祖とその継承者とも言うべき曇曠、法成の場合はどうだろうか？曇曠については弥勒信仰を示す明確な史料は残念ながら残っていない。しかし法成の場合は遼眞讚に言及がある。そこでは法成の仏教学における卓越した才能を賞賛した後、以下のような文章が現れる。

Pelliot Chinois 2913 (3), Pelliot Chinois 4640 (8) 大唐燉煌譯經三藏吳和尚遼眞讚³⁵

（前略）自歸唐化，溥福王畿。太保欽奉，薦爲國師。請談維(唯)識，發耀光輝。星霜不易，說盡

³² 平野 1960; 1961 参照。

³³ 写真は http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=23209294816;recnum=522;index=2 に公開されている。録文は黄/呉 1995, 293-298 参照。

³⁴ T. 2053, 277a21-23. 下線部は上記願文との異同を示す。

³⁵ 写真は http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=23788595112;recnum=60114;index=4、及び http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=23798889713;recnum=61934;index=2 で公開されている。録文は姜/項/榮 1994, 211-212 参照。

無依。化周不住，縁散則離。乗杯既往，擲鉢騰飛。兜率天上，獨歩巍巍。

「(前略) (敦煌が) 唐の王化に帰順してより、(法成は) 福を王朝の中心地にひろめた。太保(=張議潮) は(彼を) つつしみ奉じて推薦して国師とした。(法成が) 請われて唯識の教えを語れば、光輝いた。年月変わることなく、教えを説いている時には(何にも) こだわらないことを徹底した。人々を教化して回ってとどまらなかったが、(法成を形成していた) 縁が散り離れてしまった。(法成は川を) 渡って既に(彼岸へ) 赴いてしまった。(托鉢用の) 鉢を擲って、そちらへ飛び去ってしまった。兜率天の上にて(法成は今) 独り気高く歩んでいることだろう。」

ここでは法成が唯識の学に精通していたことを賞賛するのみならず、彼と上生信仰の関連が明確に示されている。曇曠により敦煌へもたらされた唯識学も玄奘、窺基の上生信仰を受け継ぎ保持していたのであろう。

また他の敦煌文献中にも弥勒信仰の形跡を見つける事が出来る。例えば ペリオ将来の漢文文書Pelliot Chinois 2854中に含まれる「正月十二日先聖恭僖皇后忌晨行香」と題された文献には以下のような文言が見える。

Pelliot Chinois 2854³⁶

(前略) 惟願以斯廣福，无疆勝因，先用益先聖皇后靈識。伏願足躡紅蓮出三界，逍遙獨歩極樂郷，安養世界睹彌陀，知足天宮遇弥勒。(後略)

「(前略) ただこの広い福と永遠の勝因を以て、まずは先の聖皇后の御霊の利益となることを願います。(先の皇后が) 紅蓮の上に立ち、三界より出て、極樂郷を独り静かに歩き、安養世界において阿弥陀を見て，兜率天の宮殿で弥勒に会うことを伏して願います。(後略)」

この文書は唐の穆宗(820～824)の亡き恭僖皇后(～845)のため、当時帰義軍節度使であつた張淮深により行われた儀式の際に書かれた願文である。ゆえにその作成年代は、彼がその地位にあつた888-890年と推定できる³⁷。ここには阿弥陀と共にではあるが、天宮の弥勒との邂逅が確かに願われている。敦煌政権トップによりいわば公的な場で発表された願文に上生信仰への言及があるという事実は、この時期の敦煌でいまだこの信仰が広く流行していたことの証左に他ならない。

さらに、スタインコレクションに属する他の文書、S.86は病没した馬醜女の為に功德の回向を目的として淳化二年(991)に書かれた願文であるが、そこには寺院へ寄進された様々な物品のリストが掲載され

³⁶ 写真は http://dp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=2385460709;recnum=60036;index=6 に公開されている。録文は黄/呉 1995, 724-725 参照。

³⁷ 張淮深の活躍年代については、例えば榮 1996, 11 参照。

ており、『仏説觀彌勒菩薩上生兜率天經』八十部も含まれている。またこの願文の最後は以下のような文章で締めくくられている。

S.86³⁸

（前略）右件所修終七已後，並將奉為亡過三娘子資福。超拔幽冥，速得往生兜率内院，得聞妙法，不退信心，瞻礼毫光，消除罪障，普及法界。一切含靈，同共霑於勝因，齊登福智樂果。謹疏。

「（前略）右の修めた（功德）は，初七日以後に，全て奉じて亡き三娘子の為に功德を施します。（三娘子が）幽冥の世界を抜け出して速く兜率天にある内宮に生まれ変わることが出来て，妙な法を聞く事が出来て，その信心を後退させる事なく，毫光を礼拝して，罪障が取り除かれ，（この功德が）法界に普く及びますように！全ての衆生は（彼女と）共に勝因の恩恵に預かり，身を慎んで，ひとしく功德と知恵の喜ばしい果に登りますように！謹んで（右のものを）簡条書きにいたします。」

ここでは亡き馬醜女のため，明確に兜率天への上生が願われている。この二つの敦煌出土文書は，いずれも法成の死後に作成されたものであり，特に後者は10世紀末の作成になる。すなわち敦煌における上生信仰は，曇曠，法成といった敦煌唯識学を代表する学僧に留まらず広く流行し，10世紀末に至ってもその痕跡を見いだすことができるのである³⁹。とすれば西ウイグル王国との交流が盛んとなったとき，敦煌から流入した漢人仏教が契機となって，当初マニ教との密接な関係の中で発展していた弥勒下生信仰と並んで，ウイグル仏教でも上生信仰が行われるようになったと考えてもあながち間違いではなからう。古ウイグル語仏典奥書や序文に見られる上生信仰はこうした変化の結果である可能性も考慮すべきである。

4. ウイグル仏教文献中に見られる弥勒信仰

以上においてウイグル族の間にはまず，マニ教との関連から弥勒下生信仰が広まったが，それだけではなく上生信仰も流行していたことが奥書の内容から確認でき，そしてその流行には敦煌唯識学との密

³⁸ 写真は http://dp.bbaw.de/database/oo_scroll_ha4d?uid=13163566257;recnum=86;index=1 に公開されている。録文は 金岡 1977, 432-433 参照。

³⁹ 6世紀から10世紀に敦煌では観音菩薩や地藏菩薩が篤く信仰され，さらに敦煌出土チベット語文書からは10世紀以降，観音信仰が盛んであった様子が指摘できるという[金岡 1977, 449; van Shaik 2006, 66]。ただ赤木崇敏氏の指摘するように，敦煌では特に10世紀以降，帰義軍節度使を転輪聖王に比する表現が願文等に多く見られるようになるが，この転輪聖王思想の背景には弥勒信仰が存在すると言われている[赤木 2013, 12-13]。赤木氏は敦煌文献から見てむしろ帰義軍節度使の場合には観音信仰との深い関係を示唆されているが，同時にウイグルを含めた中央アジアにおける弥勒信仰の流行も考慮しつつ，改めて転輪聖王思想と弥勒信仰の関連についてさらなる研究の必要性に言及されている。

接な関係が一因となった可能性を指摘した。

これまで紹介してきた文献は、古ウイグル語仏典やそれに付された奥書の類いであったが、ウイグル仏教中に見られる弥勒信仰の形跡は、これらにとどまらない。仏や菩薩を讃える礼懺文や讃歌中にも弥勒菩薩を題材とするものが散見される。古ウイグル語仏教文献の一つ、*Insadi-Sūtra*とよばれる経典は弥勒への讃歌を含むことで有名であるが、最近その一部が漢文の『上生礼』と良く一致することが新たにZieme氏により指摘された⁴⁰。この文献の成立年代は不明であるものの、現在残っている写本は恐らくモンゴル期のものである。また漢文の『上生礼』自体もウイグル人により書写されていた事実があるという⁴¹。さらにZieme氏により発表された四行詩の一つが、最近新たに橘堂氏により『弥勒啓請礼』であると同定された⁴²。

ここでZieme氏により発表された古ウイグル語文書Mainz 813にも注目したい⁴³。この文書は漢文仏典の裏を再利用して書かれたもので、その内容は弥勒下生を題材とする。全体としては草書体で書かれているが、部分的にサンスクリット語由来の仏教用語にブラフミー文字が使用されている⁴⁴。書体・用語から見てもおそらく13～14世紀のものと推定されるが、この文書における弥勒下生の描写はかなり詳細である。

yänä kaçan kayu üdün älig yeti koltı alı [yüz tımän yıllarnıñ ärtmäkinä] ketumañ kät-lig uday tağ-nıñ töpösintä
[brahmāyu brahmañ akaś kök kalık-nıñ] yüzintä **brahmāvatī** hatun paryiś tilgän iç[intä maitri burhan-lıg] mıñ yaruk-
lug küñ t(ä)ñri tilgän-i bo yertinç[ü yer sıvda tuga yarlıkasar ol] ugur-ta y(e)mä şankki č(a)kravart han-lıg töziñ
[ugušta tugup bälgürüp] **pravara-lıg** ulug yañı küñ kılup bursañ [**bramasariğhālambanı** buyan-ları-nıñ
äsirijü tüş-[lärin äşidip asıghıg maitri burhan-tın] alp bulgu-luk burhan kutıya täggülük vyakri[ft alkaş alıp ol
alkaştakača katıg-]lanu tavrānu

「(前略) もしもある時に、57億6百万年が過ぎた後に、Ketumañ城に属するUdaya山の頂上にて、
[バラモンBrahmāyuたる天の]表にて、Brahmāvatī王妃たるparyeśa輪の[中から弥勒仏という]千の輝
きを持つ日輪がこの[世に生まれなさるなら]、その時にまた、Śaṅkha転輪王の高貴なる[時に生ま

⁴⁰ BT III; Zieme 2013.

⁴¹ この事実は橘堂氏により指摘された [Kitsudō 2011, 331-335].

⁴² BT XIII, 117; Kitsudō 2011, 335-339. さらに古ウイグル語仏教文献ではないが、敦煌出土の『仏説阿彌陀經講經文』と呼び習わされる漢文写本 S.6551 も重要である。この講經文は「聖天可汗大廻鶻国」にて作成されたとあるが、この「大廻鶻国」が西ウイグル王国であることは、張広達、榮新江両氏により論証された [張榮 1989]。最近、両氏の説に反してこれを東ウイグル可汗国と捉える説が提出されているが、上記のようなウイグルと仏教との関わりを考えれば、受け入れ難い [李 2003; 董 2004]。この講經文にも兜率天への言及がある。

⁴³ Zieme 1994. 写真 は http://turfan.bbaw.de/dta/mainz/images/mainz0813_seite1.jpg に公開されている。下記に引用した転写は基本的にZieme氏の解釈に従うが部分的に筆者の解釈も取り入れている。

⁴⁴ ブラフミー表記の部分は下記の転写テキストでは太字で示されている。

れ現れなさるなら], (私たちは) *pravāraṇa*の大きな儀式をして, 僧衆を支える良い行いのための *brahmāsaṃghalaṃbaṃ*という功德の様々な果[のことを聞いて, 益ある弥勒仏より]得難い仏果に達すべき授[記を得てその授記に見合うよう精進しつつ, ... (後略)]

この文書を初めて研究, 発表したZieme氏はこれが奥書である可能性を示唆し, 筆者も当初はその判断を受け入れていた。しかし先に挙げた奥書の書式とは部分的に類似する部分もあるものの, 全体としては明らかに一線を画している。さらに上に引用したMainz 813の一部とほぼ同一の文章が, 他の文書 Mainz 738 (T II D 315) 中にも現れる⁴⁵。この文書は*Garbapariṃanācāni sūtra* (『仏説胎解脫經』と再構成できる)と題された經典の一部であるが, Mainz 813に一致する部分は經典の本文ではなく, この經典の書写を依頼した人物によって作成されている。そして文中においてこの部分は*kut kolummak*「福をねがうこと」と称され, さらにこの文章の後に奥書が付されている。また筆者は現在Mainz 813に代表されるような一部ブラフミー表記を含む古ウイグル語仏教文書の研究を進めているが, この種の文献中には題材は様々であるものの, Mainz 813と非常に似た書式で書かれた文書が散見する。さらにMainz 813と並んで弥勒菩薩と兜率天に言及する文献も, 一点だが発見することができた⁴⁶。Mainz 813の呼称*kut kolummak*「福をねがうこと」を考慮するなら, これらの文献は奥書ではなく「願文」もしくは「祈願文」と総称すべきであろう。

その成立年代は定かではないものの, ウイグル仏教にはある特定の仏や菩薩, 經典を祈願や礼懺の対象として祈願文や礼懺文を, 四行詩の形, もしくは散文である一定の書式に則って作成するという伝統が確かに存在した。そして残存する古ウイグル語仏教文献を見る限り, それはモンゴル期まで保持されていたらしい。そうして作成された文献には, 明らかに漢文原本を同定できるものも存在するが, 大半はおそらくウイグル仏教徒自身の手によるものであったのだろう。そこで興味深いのは, こうした祈願文や礼懺文に現れる弥勒信仰には, 下生信仰も存在するものの, 上生信仰と思しき形態が多いという事実である。この信仰形態とそれが反映されている文献の種類とは敦煌のそれと驚くほど似ている。もちろん上生信仰にしても, 仏教徒が弥勒への信仰を祈願文や礼懺文の形で表現することも敦煌, トルファン地域にだけ限定される特徴というわけではない。しかしながら弥勒信仰に関しては, 交流のあった両地域にこれだけの共通点が確認されるということは指摘しておきたい。

⁴⁵ この文書も既に P. Zieme 氏により発表されている。該当部分は BT XXIII, 170-171 参照。写真は http://turfan.bbaw.de/dta/mainz/images/mainz0738_III_detail1.jpg に公開されている。

⁴⁶ Ch/U 6885 がそれに当たる。この文書に関する研究は現在準備中の拙著に含まれる予定である。この文書の写真は http://turfan.bbaw.de/dta/ch_u/images/chu6885versototal.jpg を参照。

5. 結語

以上、主に古ウイグル語仏教文献中に散見される弥勒信仰の諸相を出来る限り収集し、そこからウイグル仏教におけるこの信仰の形態を明らかにしようと試みた。その過程で確認できた点は以下の5点である。

- 1.ウイグル仏教に流入した弥勒信仰はこれまで特にマニ教との関係性が強調され、その信仰形態にまで踏み込んで議論されることはなかった
- 2.しかしながら残存する仏典奥書の記述を詳細に見て行くと、下生信仰と並んで上生信仰も行われていた形跡が確認できる
- 3.ウイグルにおける上生信仰の流行に関しては、トカラ仏教からの影響の他、西ウイグル王国と密接な関係を築き、なおかつ当時中国西北地域における仏教の一大中心地であった敦煌の唯識学が一定の役割を果たした可能性も考慮に入れるべきである
- 4.ウイグル仏教徒の間に流行した弥勒信仰は、上生・下生信仰ともに一過性のものとどまることなく、時代を経てモンゴル期に至るまで深く信仰され続けた
- 5.その信仰は仏典や奥書のみならず、祈願文や礼懺文にも顕著に現れている

もとよりここで提示できた結論は、ウイグル仏教における弥勒信仰に関する全問題の解決にはほど遠い。特に本稿では敦煌仏教とウイグル仏教との密接な関係に焦点を当てて論じてきた。前者が後者に多大な影響を与えたのは事実であるが、この両者の関係のみに留まるほど問題は単純ではない。既に橘堂氏によりウイグル仏教には遼仏教の影響も見られることが指摘されており⁴⁷、これが弥勒信仰にも当てはまるのか、これから遼仏教の実態が明らかになるとともに更に研究されねばならない。さらに打本氏の論考が示唆するように⁴⁸、美術資料に現れる弥勒信仰も重要な研究対象である。中央アジアには仏教遺跡に描かれた壁画も多数発見されており、こうした壁画の解釈、研究は、決して豊富とはいえない文献史料と相補関係にある。こうした絵画資料の研究も取り入れつつ中央アジア全体の弥勒信仰の中にウイグル仏教のそれを位置づけていくことが、これからの重要な研究課題である。

⁴⁷ 橘堂 2013 参照。

⁴⁸ 打本 2012 参照。

文献目録

略号

- BT III Semih Tezcan: *Das uigurische Insadi-Sūtra*. 1974. Turnhout.
- BT XXIII Peter Zieme: *Magische Texte des uigurischen Buddhismus*. 2005. Turnhout.
- BT XXVI Yukiyo Kasai: *Die uigurischen buddhistischen Kolophone*. 2008. Turnhout.
- T. 高楠順次郎・渡辺海旭(編)『大正新修大藏經』1924-1932. 東京.

赤木崇敏

- 2013 「金輪聖王から菩薩の人王へ——10世紀敦煌の王権と仏教——」『歴史の理論と教育』139, 3-17.

董艷秋

- 2004 「《仏説阿彌陀經講經文》写作時代考」『敦煌研究』2004-1, 73-77.

Elverskog, Johan

- 1997 *Uygur Buddhist Literature*, Turnhout.

von Gabain, Annemarie

- 1957 *Maitrisimit*. Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule I, Wiesbaden.

Geng, Shimin / Laut, Jens Peter / Pinault, Georges-Jean

- 2004a Neue Ergebnisse der *Maitrisimit*-Forschung (I), in: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 154-2, 347-369.

- 2004b Neue Ergebnisse der *Maitrisimit*-Forschung (II): Struktur und Inhalt des 26. Kapitels, in: 『内陸アジア言語の研究』19, 29-94.

平野顯照

- 1960 「敦煌本講經文と仏教經疏との關係」『大谷学報』40-2, 21-32.
- 1961 「敦煌本講經文と仏教經疏との關係(続)」『大谷学報』41-2, 28-38, 58.

黄徵/吳偉

- 1995 『敦煌願文集』長沙.

Hutter, Manfred

- 2002 Mani als Maitreya, in: Wolfgang Gantke / Karl Hoheisel / Wassilios Klein (eds.) *Religionsbegegnung und Kulturaustausch in Asien*. Studien zum Gedenken an Hans-Joachim Klimkeit, Wiesbaden, 111-119.

姜伯勤/項楚/榮新江

- 1994 『敦煌遼真讚校録并研究』台北.

香川孝雄

1963 「弥勒思想の展開」 『仏教大学研究紀要』 44/45, 215-244.

金岡照光

1977 「敦煌文献に見られる諸神諸菩薩信仰の一樣相—題記・追善文・願文等を主として—」 『吉岡博士還暦記念道教研究論集—道教の思想と文化—』 東京, 429-456.

笠井幸代 Kasai, Yukiyo

2011 「古ウイグル語仏典奥書—その起源と発展—」 森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ—シルクロード東部の民族と文化の交流—』 東京, 301-334.

2013 Der Ursprung des alttürkischen Maitreya-Kults, in: Yukiyo Kasai / Abudhurishid Yakup / Desmond Durkin-Meisterernst (Hrsgg.) *Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit*, Turnhout, 67-104.

橘堂晃一 Kitsudō, Kōichi

2008 「ウイグル語訳『観弥勒上生兜率天経賛』について」 『仏教史学研究』 51-1, 24-46.

2011 Two Chinese Buddhist texts written by Uighurs, in: *Acta Orientalia Hungaricae* 64-3, 325-343.

2013 Liao influence on Uigur Buddhism, in: Imre Galambos (ed.) *Studies in Chinese manuscripts: From the warring states period to the 20th century*, Budapest, 225-247.

2014 『ウイグル文慈恩宗唯識文献の研究』（2014年 龍谷大学博士号学位請求論文）

Klimkeit, Hans-Joachim

1987 Buddhistische Übernahme im iranischen und türkischen Manichäismus, in: Walther Heissig / Hans-Joachim Klimkeit (eds.) *Synkretismus in den Religionen Zentralasiens. Ergebnisse eines Kolloquiums vom 24. 5. bis 26. 5. 1983 in St. Augustin bei Bonn*, Wiesbaden, 58-75.

百済康義

1983 「妙法蓮華経玄賛のウイグル訳断片」 護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』 東京, 185-207.

Laut, Jens Peter

1986 *Der frühe türkische Buddhismus und seine literarischen Denkmäler*, Wiesbaden.

2002 Gedanken zum alttürkischen Stabreim, in: M. Ölmez & S.-C. Raschmann (eds.) *Splitter aus der Gegend von Turfan. Festschrift für Peter Zieme*, Istanbul/Berlin, 129-138.

von Le Coq, Albert August

1919 Kurze Einführung in die uigurische Schriftkunde, in: *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen an der Friedrich-Willhelms-Universität in Berlin*, Westasiatische Studien 11, 93-109.

李樹輝

2003 「S. 6551講經文写作年代及相關史事考辨」 『敦煌研究』 2003-5, 55-60.

松本文三郎

1911 「弥勒淨土論」 『弥勒淨土論・極樂淨土論』 東京, 9-209 (Rep. 2006).

Mironov, Nikolai D.

1928 Kuchean Studies I. Indian Loan Words in Kuchean, in: *Rocznik Orientalistyczny* VI, 89-169, 274-275.

Moerloose, Eddy

1980 Sanskrit Loan Words in Uighur, in: *Journal of Turkish Studies* 4, 61-78.

森安孝夫 Moriyasu, Takao

1977 「ウイグルの西遷について」 『東方学報』 59-1/2, 105-130.

1980 「ウイグルと敦煌」 榎一雄(編) 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』 東京, 297-338.

1985 「ウイグル語文献」 山口瑞鳳(編) 『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』 東京, 1-98.

1987 「敦煌と西ウイグル王国—トウルファンからの書簡と贈り物を中心に一」 『東方学』 74, 58-74.

1989 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」 『史学雑誌』 98-4, 1-35.

1994 「ウイグル文書簡記(その四)」 『内陸アジア言語の研究』 9, 63-93.

2000 「沙州ウイグル集団と西ウイグル王国」 『内陸アジア史研究』 15, 21-35.

2001 Uighur Buddhist Stupa Inscriptions from Turfan, in: L. BAZIN & P. ZIEME (eds.) *De Dunhuang à Istanbul. Hommage à James Russell Hamilton*, Turnhout, 149-223.

Nattier, Jan

1988 The Meaning of the Maitreya Myth, in: A. SPONBERG & H. HARDACRE (eds.): *Maitreya, the Future Buddha*.

Cambridge, 23-47.

Röhrbom, Klaus

1997 Die alttürkische Xuanzang-Vita: Biographie oder Hagiographie?, in: Petra Kieffer-Pülz & Jens-Uwe Hartmann (Hrsgg.): *Bauddhavidyāsudhākaraḥ* Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of his 65th Birthday, Swisttal-Odendorf, 551-557.

荣新江

1991 「公元十世紀沙州歸義軍与西州回鶻的文化交往」 『第二届敦煌学国际研讨会论文集』 = 「曹氏歸義軍与西州回鶻的文化交往」 『歸義軍史研究—唐宋時代敦煌歷史考索』 1996, 上海, 364-397.

1996 「歸義軍大事紀年」 『歸義軍史研究—唐宋時代敦煌歷史考索』 上海, 1-42.

庄垣内正弘

- 1978 「古代ウイグル語」におけるインド来源借用語彙の導入経路について 『アジア・アフリカ言語文化研究』 15, 79-110.

van Shaik, Sam

- 2006 The Tibetan Avalokiteśvara cult in the tenth century: Evidence from the Dunhuang manuscripts, in: Ronald M. Davidson & Christian K. Wedemeyer (eds.) *Tibetan Buddhist Literature and Praxis. Studies in its Formative Period, 900-1400*. PIATS 2003: Tibetan Studies: Proceedings of the Tenth Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Oxford, 2003, Leiden/Boston, 55-72.

Sundermann, Werner

- 1997 Manichaeism meets Buddhism: The Problem of Buddhist Influence on Manichaeism, in: Petra Kieffer-Pülz & Jens-Uwe Hartmann (Hrsgg.): *Bauddhavidyāsudhākaraḥ* Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of his 65th Birthday, Swisttal-Odendorf, 647-656.

打本和音

- 2012 「ガンダーラにおける「兜率天上の弥勒」への信仰について—『出三蔵記集』『梁高僧伝』を中心に—」 『密教図像』 31, 1-18.

上山大峻

- 1964 「敦煌と曇曠の仏教学」 『東方学報』 京都 35 = 「西明寺学僧曇曠と敦煌の仏教学」 『敦煌仏教の研究』 1990, 京都, 17-83. (加筆)
- 1967-1968 「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」 『東方学報』 京都 38, 39 = 「大蕃国大徳三蔵法師法成の人と業績」 『敦煌仏教の研究』 1990, 京都, 84-246. (加筆)

吉田豊

- 1997 「マニ教と仏教の出会い—仏教がマニ教に与えた影響の問題—」 『仏教文化研究所紀要』 36, 11-22.
- 2007 「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の形式の来源について—百済康義先生のソグド語仏典研究を偲んで—」 『仏教学研究』 62/63, 46-87.

張広達/榮新江

- 1989 「有関西州回鶻的一篇敦煌漢文文献」 『北京大学学報』 (哲学社会科学版) 1989-2, 24-36.

Zieme, Peter

- 1981 Bemerkungen zur Datierung uigurischer Blockdrucke, in: *Journal Asiatique* 269, 385-399.

- 1990 Review for Geng Shimin & Klimkeit, H.-J.: *Das Zusammentreffen mit Maitreya*. Die ersten fünf Kapitel der Hami-Version der Maitrisimit. In Zusammenarbeit mit H. Eimer und J. P. Laut herausgegeben, übersetzt und kommentiert, 2 Bde, in: *Orientalische Literaturzeitungen* 85-1, 66-69.
- 1992 *Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo*, Opladen.
- 2013 Ein alttürkischer Maitreya-Hymnus und mögliche Parallelen, in: Yukiyo Kasai / Abudhurishid Yakup / Desmond Durkin-Meisterernst (Hrsgg.) *Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit*, Turnhout, 403-416.